2009 年 7 月 11 日

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 2 回全体集会 第 2 セッション・コメント

宇山　智彦

１．王朝史・部族史から国民史・民族史へ

＜「均質で空虚な時間の中を暦に従って移動していく堅固な共同体としてのネイション」（アンダーソン）の歴史＞

(1) 時間意識の変化

部族史ではしばしば時系列が乱れる（例：バシコルト部族史の「カエサルの子ソクラテス」）

年代記型の王朝史では時系列は基本的に乱れないが、「堅固な共同体」はない

(2) 支配層と（匿名の）民衆の一体化

ロシア史の場合:Tatishchev の Istoriia Rossiiskaia（18 世紀前半執筆）や Karamzin の Istoriia gosudarstva Rossiiskogo（1816-29）は、古代諸族の歴史を除けば、公やツァーリなど支配者の事績の記述。Solov'ev の Istoriia Rossii s drevneishikh vremen（1851-79）になると、治世ごとの時期区分は変わらないものの、経済や文化にも言及し、より分析的なスタイル（王朝の枠を越えた国家と社会の構造）

オスマン帝国やイランでは？

(3) 由緒正しさを示すための系譜の「付け替え」は王朝史・部族史と民族史に共通する現象

「王の偉大さ」の強調が国民史・民族史において持つ意味

ソ連・中国ではいったん否定されるがのち復活

２．どのような他者を意識するか

(1) 西洋の歴史学の受容・反発は確かに重要だが、しばしば「近い他者」との関係がキーに

カザフのタタール・サルトとの差異化、「タタール」「テュルク」民族名論争、中国と日本・・

(2) イランの場合

『シャー・ナーメ』（1010 年完成）の「イランとトゥラン」意識はどの程度受け継がれたか

ちなみに、同書を愛国主義の書として見るのは妥当か

「イラン史」の成立は政治状況とどう関係するか。もっぱらアラブの歴史からの分離として見てよいか。オスマン帝国をどう意識？

(3) オスマン帝国の場合

オスマン帝国にとっての他者は？ トルコ史への移行に伴って他者認識はどう変わったか

３．領域との関わり方

(1) 民族史としての 2 つの方向

①現在占める領域を重視（ソ連の民族起源論での「自生性 avtokhtonnost'」）

②広い世界や古い文明とのつながりを主張（シュメール、チンギス、インディアン・・）

両者はしばしば対立（ソ連での自生性論と汎イデオロギーとの対抗）
しかし「トルコ史テーゼ」などでは共存

(2) 国家史・大国史として

①辺境・異民族に対する視線

オスマン帝国における「オリエンタリズム」（Deringil、秋葉ら）は歴史記述にどう影響？
イラン史におけるテュルク系諸民族の位置づけ？

②領土拡張の正当性の主張

ロシアでのツァーリの恩恵の強調。ソ連では「最小の悪」から「併合の進歩的意義」へ
近代中国での朝貢体制論。費孝通の中華民族多元一体論

③境界認識

国境（の形成）についてどのように記述？（特にイランとアフガニスタンの国境）
歴史書に地図を入れるようになるのはいつからか

４．帝国と非帝国を分けるもの？

(1) 帝国概念のインフレ

当時の自称との齟齬はオスマン朝や清朝を含め多くの場合に存在
研究者による自由な定義としては、イランを帝国と呼んでも問題ないはず

(2) 同時代の西洋人の（漠然とした）観念としての帝国・皇帝

モンゴル（マルコ・ポーロ、カルピニ）、ティムール（クラヴィホ）

(3) 国際法体系の中で各国が得た地位と自己主張

条約での西欧語表記：オスマン帝国は Empire。露清（ネルチンスク条約ラテン文）も imperium
イランは？ 日本、朝鮮が帝国を名乗った理由

(4) 東洋諸語と西洋諸語の「帝国」「皇帝」概念の接合とずれ

ロシア帝国のテュルク系諸民族はツァーリを「白いパードシャー」と呼んだ

南アジアの場合についてフロアからご教示を

このテーマに関連する拙稿：

１．「カザフ民族史再考：歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』Vol. 2, No. 1、1999 年、85～116 頁。

２．“From ‘Bulgharism’ through ‘Marrism’ to Nationalist Myths: Discourses on the Tatar, the Chuvash and the Bashkir Ethnogenesis,” *Acta Slavica Iaponica* 19 (2002), pp. 163–190.

３．「旧ソ連ムスリム地域における「民族史」の創造：その特殊性・近代性・普遍性」酒井啓子・臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム（イスラーム地域研究叢書⑤）』東京大学出版会、2005 年、55～78 頁。